

## 視察報告書

平成30年10月10日（水）

・埼玉県熊谷市

「学力向上対策推進事業」について

平成30年10月11日（木）～12日（金）

・新潟県長岡市 シティホールプラザ アオーレ長岡

第80回全国都市問題会議

議題「市民協働による公共の拠点づくり」

木谷万里、玉川英樹、松本裕之、西村雅文、藤原繁樹、大野恭平、織田正樹

### 【報告】

10月10日（水） 13時30分～15時30分

熊谷市「学力向上対策推進事業」について

教育委員会 学校教育課  
岡村賢一指導主事

熊谷市の教育の基本となっている心得

「教育の道は、家庭の教えで芽を出し、学校の教えで花が咲き、世間の教えで実が成る。」

（幡羅高等小学校『家庭心得』明治31年）

### 【基本方針】

1. 学力日本一を目指す（知・徳・体）
2. 安全で快適な学校づくりを進める
3. 魅力ある生涯学習事業を充実させる
4. 文化芸術活動を支援する
5. 学校・家庭・地域が連携して子どもを育てる
6. 人権尊重のまちをつくる
7. 総合的な教育・文化施設の整備を進める
8. ICT（情報通信技術）を活用し教育の質的向上と教職員の業務負担の軽減を図る



熊谷市役所 外観

## 熊谷市の生きる力を育むための土台となっている「4つの実践と3減運動」

### 4つの実践

- 朝ごはんをしっかりと食べる。
- 呼ばれたら「はい」と元気よく返事をする。
- 「ありがとう」「ごめんなさい」と言う。
- 友だちをたくさんつくる。

### 3減運動（大人が手本となって）

- テレビの時間を減らします。
- ゲームの時間を減らします。
- スマートフォン・携帯電話やパソコンに触れる時間を減らします。

▽（家族で約束を）

- ・家族との会話の時間を増やします。
- ・読書の時間を増やします。
- ・予習・復習の時間を増やします。

下記のチラシを、10年間、毎年全戸配布し、周知徹底をして、現在では89%の家庭で実践されています。



## 教育の土台となる「知」・「徳」・「体」

「知」・・・「子供たちの学力を伸ばす」

学習内容を明確にした授業を行い、一人ひとりに応じた、きめ細かな指導により、子供たちに「わかった」「できた」「ほめられた」という体験を積み重ねていく。さらに、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」を通して学習指導の充実を図る。

「徳」・・・「子供たちの豊かな心を育む」

道徳性を養っていく。行為に表すことが価値あることとし、道徳の「見える化」に取り組む。

「確かに〈こころ〉はだれにも見えない/けれど〈こころづかい〉は見えるのだ」  
(「行為の意味」 宮澤章二)

「体」・・・「子供たちの体力を伸ばす」

運動の特性や楽しさを味わわせる授業を行い、子供たちの体力と運動の技能を高め、体力向上に取り組む。

「知力」だけを学力とは捉えず、思いやりの心などの「道徳」や、走力や投力などの「体力」も、広い意味での学力であり「知・徳・体」のバランスの取れた力を学力としている。教育カリキュラムを、前期・後期の2期制とし、授業時間を確保しやすくし、成果もある。成績表の配布は、夏休み前・前期終了時・冬休み前・後期終了時の計4回。埼玉県内の10市程度が採用している。

## 生徒指導マニュアル（いじめ防止対策マニュアル）の活用・実践

・「いじめ防止」も大人が手本となって進めるべき！！

（「子供は大人の言ったようにはやらない。大人のやったようにやる」）

・いじめの発見時は即座に緊急職員会議を開き、情報共有する。

→「事あれば、先生方はすぐ動いてくれる」という安心感を与える

・いじめ解消のための具体的な指導・援助を組織として対応する。

コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）を導入し、学校と地域住民・保護者が力を合わせ、地域総掛かりで学校の運営に取り組む「地域とともにある学校」を目指す。

## ☆「ラウンドシステム」

一年間で教科書を何度も繰り返して使うことにより、英語の定着を図ろうとする取り組み平成24年に開校した横浜市の中高一貫校で初めて導入。英検を含めてすばらしい成果。熊谷市では、平成25年からこのシステムを手本に授業改善に取り組む。まずは市内3校が推進校となり、平成27年からは全市で導入。

中学一年生で、1年間でラウンドが5回あり、ただ単に5周するのではなく、各ラウンドに目標を設定し、その目標達成のための授業を行う。

「ラウンド1」－「概要理解ができる」

「ラウンド2」－「音と文字の一致ができる」

「ラウンド3」－「スラスラと音読ができる」

「ラウンド4」－「文構造を習得し、会話につなげる」

「ラウンド5」－「ピクチャーカードを使い、教科書の内容を自分の言葉で仲間に語る」

最後に、「再話」で語った英文をノートに書いて、個人独自の「マイオリジナルテキスト」を作成し、すべての課題が終了するというもの。

このシステムに変更後、中2からの伸びが素晴らしく、中学校卒業時、英検3級レベルに達しているのが、埼玉県では40%だが、熊谷市は60%という好結果が出ている。

さらに、「教師がいかに関心を持って子供たちをかまうか」ということを大切にしている。

10のポイントを意識して、「自信を持って自己表現できる生徒の育成」を目指している。

- ① 笑顔 教師の笑顔はそれだけで一つの教育力
- ② 対話 様々な意見や考えを突き合わせ、より深いレベルの理解や思考を目指す
- ③ 我慢 いかにして子供に、独力で学習する場面を与えるか
- ④ 気付き 「教師が説明する授業」から「生徒が見つかる授業」への転換
- ⑤ 共有 お互いに「伝え合う」活動を位置づけ、仲間と考えを共有する
- ⑥ 漆塗 各ラウンドの目標を変えながら何度も塗り重ね、光沢を高める
- ⑦ 量から質 「意味を相手に伝達する」という目的に沿って、長いスパンでのブラッシングを意識する
- ⑧ タイミング 子供の力が伸びる瞬間を見逃さず、子供と呼吸を合わせかまっていける
- ⑨ 仕込 「好きなものが話したくなる」という場面に授業中に意図的に仕込む
- ⑩ 教科書 全編を一つのストーリーとし、子供の実体験と比較できるようにする

## 「KUMAGAYA ROUND SYSTEM」を支えるもの

- ・多読用リーダーの活用（各中学校に約1,000冊ずつの導入を進めている）

易しい英語の本を大量に読む

生徒の3原則

- ①辞書は基本的に引かない
- ②わからないところは飛ばす
- ③進まなくなったらその本はやめる

教師の3原則

- ①教えない
- ②押しつけない
- ③テストしない

- ・ICレコーダーの活用（各中学校に40台ずつ配布）

自分が話した言葉を録音して聞き直す

友達のスピーチを録音し、自分のスピーチの参考にする

音読の宿題を確認する（1番いい音読を録音するために何度も練習するケースが多い）

- ・英語指導専門員の活用

各中学校を巡回しながら、指導助言をする

授業実践について情報提供をする

ワークシートや指導方法の共有ができる環境整備を行うなど

・ALTの配置の工夫

中学校には各クラス週2回程度、小学校には週1回程度派遣し、チームティーチング  
通常5校に分かれて派遣をしている5人のALTを1校に集合させ、全員が1つの授  
業に参加し、「英語を話すこと」を中心に授業を行う「ALT5」を実施

・外部試験「GTEC」の活用（市町村単位では全国初）

4技能スコア型テスト「聞く」「読む」「話す」「書く」の英語力を測定し、経年受検に  
よる英語力の経過や得手不得手を分析し、解決策の研究や授業改善に取り組む

## 「KUMAGAYA ROUND SYSTEM」の神髄

- ① 練習量の確保
- ② 「再話（ストーリーテリング）で知識を使う練習に奮闘する
- ③ 生徒の息づかいを感じて「一緒に」山を登る

### 学習支援充実くまなびスクール

教員OBや教員免許状所有者、学生等の有償ボランティアによる個別指導で、生徒の基礎  
的・基本的な内容の確実な定着を図る。

市内全中学校で週に1回程度（1回2時間）実施し、年間30回以内

自学自習形式で、一部講義形式も取り入れる

市内中学生全員を対象にし、個に応じたきめ細かな指導を行い、学力の底上げに繋げる

### 【所感】

今回の視察において一番強く感じたのが、担当者の情熱です。子供達の学力をどうにかし  
て上げてあげたい。子供達の未来のためにも、より良い教育環境を提供していきたいという  
気持ちが非常に強く、感銘を受けた。そこには、学校・家庭・地域と地域一丸となって子供  
達を育てていこうという強い意志も感じましたし、それを達成するために、行政としても最  
大限の努力をされているのだと感じた。

加古川市も、地域一丸となって、教育や子育てが出来るような取り組みを充実させていく  
必要を感じた。今取り組んでいることがしっかり実となるようにするのはもちろんのこと、  
様々な先進事例を研究していき、より良い形に進化していかなければならない。

加古川市においても実践できるように、しっかりと要望していきたいと感じた。

## 第80回全国都市問題会議について

1. 会議名 第80回全国都市問題会議
2. 会議月日 平成30年10月11日(木)～12日(金)
3. 議題 「市民協働による公共の拠点づくり」
4. 主催 主催 全国市長会  
公益財団法人 後藤・安田記念東京都市研究所  
公益財団法人 日本都市センター  
長岡市  
協賛 公益財団法人 全国市長会館
5. 会場 長岡市 シティホールプラザ アオーレ長岡
6. 参加者数 約2,000名
7. 会議日程

### ◆第1日 10月11日(木)

- 開会式 開会挨拶 全国市長会会長 相馬市長 立谷 秀清 氏  
開催市市長挨拶 新潟県長岡市長 磯田 達伸 氏  
来賓祝辞 新潟県知事代理(都市局長) 永田 雅一 氏
- 基調講演 地方分権へのまなざし  
東京大学史料編纂所教授 本郷 和人 氏
- 主報告 長岡市の市民協働  
新潟県長岡市長 磯田 達伸 氏
- 一般報告
  - ・市民との対話と連携で進める津市の公共施設マネジメント  
三重県津市長 前葉 泰幸 氏
  - ・場所の時代  
建築家・東京大学教授 隈 研吾 氏  
アオーレ長岡の発注者として 筑波大学客員教授 森 民夫 氏  
アオーレ長岡での市民協働の実践 アートディレクター 森本 千絵 氏

◆第2日 10月12日(金)

●パネルディスカッション

【テーマ】市民協働による公共の拠点づくり

【コーディネーター】

明治大学政治経済学部地域行政学科長・教授 牛山 久仁彦 氏

【パネリスト】

東京理科大学理工学部建築学科教授 伊藤 香織 氏

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事長 奥山 千鶴子 氏

長岡市国際交流センター「地域広場」センター長 羽賀 友信 氏

埼玉県和光市長 松本 武洋 氏

高知県須崎市長 楠瀬 耕作 氏

●閉会式

次期開催市市長挨拶

鹿児島県霧島市長 中重 真一 氏

閉会挨拶 日本都市センター理事 三鷹市長 清原 慶子 氏

## 第 80 回全国都市問題会議 第 1 日 (10 月 11 日)

### 【基調講演】

#### 地方分権へのまなざし

東京大学史料編纂所 教授

本郷 和人

様々な歴史的事実の検証から、人口減少社会の到来を「黒船」の襲来と、比喻して捉えることで、平常時つまり「黒船」が来ない時代に於いては人々は弛緩し、また墮落する。たまに「黒船」が来襲することによって変革を志す、という人間本来の心理的状況を危機感を持った講演をされた。

人口減少社会の到来を「黒船」来襲として捉える発想は、「目からウロコ」でありました。まさに「危機」が到来しているのである。

しかし、「危機」を英訳すると emergency あるいは crisis となりますが、分解して考えると、始めの「危」は danger で文字通り「危ない」で、後の「機」は opportunity で「機会」となる。

つまり、加古川市に於いても人口減少社会に突入しているのが現実ではありますが、様々な創意工夫を凝らし、的確な市政運営を行っていく事で、「危機」をマネジメントし、さらに発展し市民幸福度を上げていく事は可能なのではないかと感じた次第であります。

加古川市の現状を正しく把握し、どういった施策が本当に必要なのかを調査・研究・検証しながら、時代にマッチした的確なアイデアを提案していきたいと思えます。

東京大学の史料編纂所 教授という「歴史の専門家」の基調講演ということで、構える受講者も見受けられましたが、現代社会は先祖が営々と築きあげてきた悠久の歴史の続きにあるという厳然たる事実があり、正しい歴史認識を持っていなければ、正しく現状を認識すること的確な施策を提案することも、おそらく不可能なのではないかとも考えます。

開催地の長岡市は、様々な歴史上の重要な事象があった地でもあり、歴史好きの私としては、非常に興味深く楽しく聴けた基調講演であったと同時に、視察研修そのものも、非常に有意義なものであった。

### 【主報告】

#### 長岡市の市民協働

新潟県長岡市長

磯田 達伸 氏

長岡市は、新潟県の中央部に位置し、人口 271,686 人、面積 891.06 km<sup>2</sup>。平成の大合併により 11 市町村が合併した。上越新幹線と自動車道が整備され主要都市へのアクセスを容易とする交通体系が充実している。食の名産品や錦鯉等多くの地域資源を有し 3 大学



1 高専と 15 の専門学校が立地し学生数は約 7 千人を数える。「何事も基本は人。人づくりこそすべての根幹である。」と「米百俵の精神」がまちづくりの指針となっている。

平成 24 年に市民協働条例を制定した。市民と行政、市民同士が、お互いの長所を持ち寄り、補い合うことで課題を解決し、まちづくりを進めていくのが「長岡の協働」である。市役所の老朽化と合併による機能の拡充のため、平成 24 年 4 月に JR 長岡駅前に、屋根付き広場「ナカドマ」を中心にアリーナ、市民交流スペース、市役所、議会が混然一体に溶け合う複合施設「アオーレ長岡」がオープンした。市役所は長岡駅から 2 km 離れた本庁舎を駅前に移転した。アオーレとは会いましょうという意味から「人々が出合い、活動する拠点」である。ナカドマやアリーナを中心に、ショッピングセンターではなく、無料で市民が集まり、情報交換ができる、自由な活動と交流の場（ハレの場）となっている。

行政として、市民が集まる場所を作らなければならない。長岡市は、校区ごとにコミセンを 41 か所設置す



ると共に、全天候型広場である「保育士（子育てコンサルジュ）のいる屋根付き公園」子育ての駅を 13 か所設置すると共に 24 か所の子育て支援センターを設置している。

人口減少、少子高齢化が急速に進展する中、地域間連携や地域資源の活用による観光や交流人口の拡大に向けた取り組みが必要である。日本三大花火の 1 つである、「長岡花火」と「醸造のまち」を PR し地域資源の情報発信に加え販売施設を備えた、観光交流拠点の検討も進んでいる。また、将来のまちの活力維持や人口減少社会の諸問題を克服するため、総合戦略「長岡リジュベネーション～長岡若返り戦略～」を策定し、将来を担う若者を地方創成の中心に据え「若者定着」「子育て」「教育」「働く」「交流」「安全安心」「連携」の 7 つの戦略を推進し、若者自らが長岡の魅力の発信とまちの活性化に取り組んでいる。さらに、平成 30 年に 3 大学 1 高専からの提案により {NaDeC BASE} を開設し、ながおか・若者・しごと機構の事務室を移設し新産業の創出と次代に対応する人材育成の拠点となっている。

地方都市は人口減少・少子高齢化が進んでいる。地域コミュニティを維持し、まちを発展させていくためにあらゆる手段を講じなければならない。自治体が一方的に公共の拠点を整備するのでは、多様な市民ニーズにこたえられず、市民活動や協働の推進にはつながらない。ほとんどの場合、行政が利用目的を定めその中で市民活動が行われてきた。市民活動は

行政の下請けではない。活動拠点は市民と行政が共同して進めていくことが必要である。現在地方都市においては、少子高齢化により学校の空き教室など利用されていない施設が増加している。このような場所を、市民協働による公共の拠点としての活用する事も視野に入れるべきである。長岡市においては、百貨店跡やスーパー跡地を活用し、市民センターを設置したり、地域活動の場や世代間の交流のスペースとして活用している。公共の拠点となる場所の創出や市民との協働によるまちづくりの取組については、行政との連携と支援の在り方を再確認し市民との協働による市民の活動拠点づくりが必要である。その拠点、主役が長岡市における「ナカドマ」であり、駅前がどのような市にとっても、最も重要な場所であるという事である。加古川市においても駅前をどうしていくかを市民とともに考えて行かなければならない。

## 【一般報告】

### 市民との対話と連携で進める津市の公共施設マネジメント

三重県津市長  
前場 泰幸氏

1962年三重県津市生まれ。1985年東京大学法学部卒業後、総務省入省。熊本県財政課長、京都市政策企画室長、宮城県総務部長、総務省大臣官房企画官などを経て、2006年デクシア銀行に転じ、東京支店副支店長。2011年4月津市長就任。現在2期目。2014年6月三重県市長会会長。2017年東海市長会会長。現在、全国市長会副会長。「笑顔があふれ幸せに暮らせる県都津市」を将来像に据え、「まちづくりから暮らしづくりへ」をテーマに市政を展開している。

## 【講演内容】

津市は、明治22(1889)年4月1日、日本で初めて市政を施行した31市の一つです。平成18年1月1日、全国でも5番目に多い10の市町村が合併し、人口28万人、面積約711k㎡が誕生した。古くは、伊勢神宮へ向かう旅人が行き交う宿場町として、藤堂藩32万石の城下町として、そして、近代は、紡績から食料品、造船、電気、輸送機器のものづくりのまちとして発展してきた。このまちに住む市民は、自分たちのことは自ら決める自治の伝統を有し、現在も市政に対する関心の高いまちである様である。平成23年の就任以来、公共施設マネジメントに関してもこのまちの住民自治の伝統を踏まえ、市民との意思疎通に留意しつつ進めている。そのような中、就任早々、既存の古くなった公共施設を統合し、大きな施設を作り上げるに当たり、様々な課題に直面したそうです。既存の3つの斎場の統合整備事業、新しく合併した南部地域に一般廃棄物最終処分場の建設、古くなったスポーツ施設(体育館、市民プール、武道館等)を統合し新しいスポーツセンターを

建設と大きなプロジェクトがあったが、何とか実現（建設）する事が出来た。ただ、市長就任1期目においては、懸案処理を進める中で公共施設マネジメントに市民との対話と連携は、客観的な情勢に合わせ必要に迫られて行った感が強いものであった。平成27年4月、再選された後、1期目の反省をふまえて、市民との対話と連携をより徹底させるため、市域を37ブロックに分けて半年に1回ずつ地域懇談会を開催することにした。1時間半の対話において、地域の課題を伺い、受け止め、次の懇談会までに市役所を挙げて解決策を探る。地域の関心事項の中には、公共施設に関わる事項も多く、自然な流れで対話と連携が継続し、公共施設の整備や改築、用途変更や廃止につながっていく事例が生まれてきた。

1つの事例として、3つの小学校の統合に向けて地域での話し合いが進められていたが、最終的にどの小学校に統合されるのかで結論が出ないでいた。このテーマで地域住民と話をすると、子どもたちのために事態を何とか動かしたいという真摯な気持ちが伝わってきており、発想を転換する必要性を感じたそうです。そのような中、地域唯一の中学校敷地に、三重県初となる小中一貫の9年生義務教育学校を開校しようとするもので、「小学校の統合」という後ろ向き課題が、「義務教育学校の新設」という新しく前向きな挑戦へと姿を変えたことで、地域住民の熱意が高まり、懸案が一気に解決へと向かった。ちなみに、新設学校「みさとの丘学園」の校歌の3番は英語である。最後に、公民館とコミュニティ施設の再編整備に関しては、施設再編の必要性は分かっている、いざ身近な施設の話となると「この施設は特別」との意見が出てくる、津市では、何度でも足を運び、顔を合わせ、汗をかき、時間をかけて粘り強く話し聞き続け、市民の最終的なご理解を得られるよう努力を重ねているとのことである。

既存の公共施設を統合などの過程で、市民の思いを把握し、その願いをかなえる公共マネジメントの実践について説明された。

最後に、前場市長から、「津市はこれからも、市民の思いを把握し、その願いをかなえる公共施設マネジメントの実現に向け、市民との対話と連携によりしっかりと取り組んで参ります」との結びの言葉でしめられた。

#### 【所感】

今回の全体のテーマは「市民協働による公共の拠点づくり」であった。

どの市町においても、公共施設の老朽化、少子高齢化による公共施設のダウンサイジング化等、公共施設のマネジメントが僅々の課題となっている。そのような状況のなか、今回、全国都市問題会議に参加し、三重県津市市長・前葉泰幸氏の「市民との対話と連携で進める津市の公共施設マネジメント」の話伺い、いかに市民の声を聞くことの重要性をとことん

重視しながらも、全体の情報を一番知っているのは行政であり、八方美人の案は出せないが、責任を持って答えていくという姿勢に、強い信念を感じた。

本市においても、平荘湖アクア交流館の廃止、北部地域の少子化による小学校の統廃合等、公共施設のマネジメントを早々に取り組む課題があることから、津市が取り組んでいる事例を参考にしながら、議会活動に活かしていきたいと思う。

## 【一般報告】

### 場所の時代

建築家「アオーレ長岡」の設計・東京大学教授

隈研吾氏

隈氏は、新国立競技場の設計にも携わるほか、歌舞伎座、ブザンソン芸術センター、マルセイユなど、国内外で多数のプロジェクトを進行中です。

隈氏は「場所を主役とする時代の到来」として、徹底的に場所にこだわって設計する建築です。その場所でしか手に入らない材料、その場所を熟知した職人の手を使い、その地の気候や環境と調和させた、人々が本当に必要とする建築を作るとのことです。

長岡市は、戊辰戦争で城を失いました。城を再建するべきだという意見もありましたが、「形」の再現でなく、「精神」を再現することこそ大切だとし、城の本丸跡に長岡駅、二の丸を市役所である「アオーレ長岡」を造りました。その「精神」とは、「米百俵の精神」です。戊辰戦争で廃墟となった長岡藩に三根山藩から贈られた百俵の米を売って、教科書などの教材を揃え、学校を創ったのです。教育第一主義で、教育が人を育み、産業を支えてきました。また、城では、城主と領民が一緒にお酒を酌み交わしていたという記録もあり、市役所に多くの人で賑わう場所にあるべきだと考えました。昔も今も市民と共にあるまちづくり、その精神と地域性を生かし、市民とタッグを組んで作り上げました。市民が誇りに思う市役所はまちなかにあり、まちと一体化し、アーケードからスムーズに入って来れる場所は、「土間」とイメージしたそうです。

その土間に屋根をつけ、冬季でも様々な活動ができる「ナカドマ」は、誰でも気軽に立ち寄り、活動できる空間です。行政と市民の活動が市松模様のように混ざり合ったデザインは壁面や大屋根のパターンとしても表現されています。木にこだわり、地場産の過ぎの間伐材をしよう、アリーナ内の木のパネルには旧厚生会館の緞帳やフローリング材を再利用しています。

議場は、市民と議会の一体感を醸成するため、一階に配置、ナカドマに面したガラス張り、天井も木がふんだんに使われています。市長室もガラス張りです。

アリーナは、様々なイベントが開催できるような設計で、これまでに大相撲、フィギュアスケートなども開催されました。長岡駅から通路で繋がるその空間には驚嘆するばかりでした。

続いて、発注者の前長岡市長の森民夫氏や、アートディレクターの森千絵氏がそれぞれの思いを語りました。

キーワードは「市役所をまちなかに」です。市民がたくさん集まる場所に市役所を作るという発想です。まちづくりは人づくり、市民協働による公共の拠点づくり、大いに刺激を受けました。

## 第 80 回全国都市問題会議 第二日

### 【テーマ】

「市民協働による公共の拠点づくり」と題して、  
いろいろな分野からの市民協働のパネルディスカッション

#### ●シビックプライド醸成のコミュニケーションポイントから考える「拠点」

＞東京理科大学工学部建築学科教授 伊藤香織氏

「都市に対する市民の誇り」をシビックプライドと言いますが、単なる町自慢や地元への親近感でなく、まちの中の象徴となるものや、市民行動としてあらわれることがある。シビックプライド研究会では、こうした市民と都市の接点となるものやことを「コミュニケーションポイント」と呼んでいる。そのマトリクスの中央には「都市情報センター」があり、シビックプライドセンターとも呼ばれ、一人ひとりの創造性がまちを変えられるとイメージ出来るような場、俯瞰的なまちと自分の生活とを重ねて思い描ける場、理解するだけでなく何らかの形で体験できる場、他者の考えを知り意見を交換出来る場であることが求められている。シビックプライドセンターの設置・運営体制や満たすべき機能については様々な可能性があるとして「市民協働による公共の拠点」そのものである。

#### ●子育て支援から見た公共の拠点づくり

＞NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事長 奥山千鶴子氏

子育てひろばとは、主に乳幼児の親子が気軽に集まれる場であり、制度上の名称は、「地域子育て支援拠点事業」で、児童福祉法に基づく事業である。

先ずは、親子の居場所が必要だと感じ、横浜市内の空き店舗を借り子育てひろばを開設。その背景には、専業主婦の孤立、雇用機会均等法以降の女性の社会参加への意欲、後押ししてくれた有識者や行政の力がありません。親たちが立ち上げた子育てひろばは、厚労省の「つどいの広場事業」のモデルにもなった。その後、いつも親子が交流でき、子育て相談、情報提供等の様々な機能を持つ子育て支援の総合的な拠点を各区1箇所設置し、子育て活動団体等と協働してネットワークを図ることや人材育成に取り組んできた。

今後は、子育て家庭が、妊娠期から安心して住んでいる地域で子育てが出来ると感じられる環境を整える為に、母子保健と子育て支援双方の関係機関・関係者との

連携のもと、子育ての孤立を防ぎ、親の自身や自発性を育む利用者主体の切れ目ない支援も構築と、子育てしやすい地域づくりが協働の視点で求められている。

### ●長岡市民主体のまちづくり

＞長岡市国際交流センター 「地域広場」センター長 羽賀友信氏

少子高齢化から人口減少の問題が取りざたされるようになり、団体自治と同時に住民自治の必要性が重要視され、長岡では自分の地域の課題は自分で解決するという前向きな意思を持った市民と市民団体の育成が急がれた。長岡駅前の市民センターから、シティプラザ「アオーレ長岡」の設置により、ながおか市民協働センターが生まれた。市民協働ネットワーク長岡が運営を行い、市民活動団体の育成、団体間の連携、相談業務を行い、長岡の課題解決、活性化、研修等の支援を行います。事例としては、子どもたちの郷土愛醸成に貢献、中山間地域の活性化を多方面からサポート、企業と他の団体とのつなぎ等がある。こういったように、センター活動は単に市民団体サポートにとどまらず、様々な主体をつなぐことで双方にとってWinwinの関係や相乗効果を作り出すハブとしての重要な役割を担っている。

### ●地域包括ケアを支える新たな拠点づくり

＞埼玉県和光市長 松本武洋氏

和光市では、受付があり規模的に大きいコミュニティセンター及び受付がなく規模が小さい地域センターを市内に展開しております。管理は、地元の利用者団体の集合体である管理協力委員会が行っている。これらの施設では、サークル活動や地元の自治会活動などを中心に、地域包括ケアや子育てに関する活動や市役所の行事も行われ、地域活動の受け皿として機能してきた。しかし、昨今は生活実態が地域に根ざさず、従来型の自治会やコミュニティ施設を通じた地域づくりでは取りこぼしかねない市民が増えている。このような状況を踏まえ、特定の機能を持つ新たな拠点を市民とともに展開し、それらは所在する地域とは直接的には関係なく、全市的な役割を担っている。その代表的な例として、「まちかど健康相談室」、「おやこ広場もくれんハウス（北第2子育て世代包括支援センター）」がある。

まちかど健康相談室は、平日の午前10時から午後3時まで、管理栄養士や看護師が常駐し、健康や栄養について相談できるサロンとして高齢者の居場所、健康学習の場として地域包括ケアの推進に貢献している。

この地域は、市内賃貸型集合住宅の最大規模の西大和団地がり、高齢化率市内最大の39.4%であり、一人暮らしの高齢者も多く、毎月400人前後の地域の住民が訪れ、健康・栄養相談等以外に子どもたちや障害者にも及ぶ幅広い場となっている。

また、もくれんハウスは、和光市駅近くで主として乳幼児とその保護者が集う「つどいの広場」事業です。平成16年、妊娠から青少年期までの切れ目なく支援する「わこう版ネウボラ」制度が始まり、その役割を担うようにもなった。月曜日から

土曜日まで9時～17時開所し、1日数十組の親子が集います。核家族が多い中、子育てのちょっとした悩み相談、子育て特有の課題を解決するために子育て世代同士のコミュニケーション等取り組んでいる。

こういった市民協働による拠点づくりは、単に施策の一端を担うだけでなく、参加、協働による市民の地域への愛着を形成し、地域へのロイヤリティを高める重要な役割を担っている。

## ●人・モノ・金の好循環を目指して

### >高知県須崎市長 楠瀬耕作氏

須崎未来塾では、地域資源を磨き活用するとともに、消費ではなく創費の出来る人材育成の取り組みとして、開講されました。修了生の中には、起業創業するケースも増加し、女性修了生が立ち上げた団体では、地域の農産物を活用したふるさと納税返礼品事業による耕作放棄地対策や教育旅行の受け入れ、空き家を活用したゲストハウス運営など地域の一翼を担っている。また、市街地再生に向けた空き家の利活用にも注力してきました。市街地機能分散や少子高齢化、人口減少等の複数の要因により、須崎市街地の商店街はシャッター街となり近年では、ショッピングモールやスーパーマーケットの撤退も相次ぎ状況は深刻化しております。まずは、人の流れの取り戻し、次に、身近に感じてもらう芸術を切り口とし「芸術や文化的価値」を創造することを目的に、「すさきまちかどギャラリー」を整備しました。場所は代表的な商屋の建物を市が譲り受け運営を開始しました。現在では、高校生カフェなどが定着し、年間入場者数が10,000人を超え一定の集客となりました。

集落活動センターは、住民自治を目指し地域住民が主体となって、地域外からの人材も受け入れながら、旧小学校や集会所等を拠点に、それぞれの地域の課題やニーズに応じて、産業、生活、福祉、防災、といった様々な活動に総合的に取り組む仕組みで、県内には47か所開所しています。集落活動センターあわでは、教育協働部、移住促進部会、観光交流部会、特産品部会、高齢者福祉部会の五つの部会中心に地域課題の解決を図り活動しております。今後は市全体で拠点整備等に取り組む方向であります。

**【所感】**5人のパネリストのそれぞれの取り組みが報告されたが、どれも市民、住民を大きく巻き込んだ取り組みであり、行政が中心で方向性を決めると言うよりは、住民主体の感が強く感じた。空き家対策は加古川市でも喫緊の課題であり学ぶところが多々あった。また、加古川市のシビックプライド醸成や子育ての集いや中心街の協働は、市民と行政が一緒に進まなければなりません、何らかの一步を出さなければと強く感じた。

## 【閉会式】

## 「行政視察」

### アオーレ長岡と中心市街地コース

#### ・まちなかキャンパス長岡

**概要：**米百俵 ―その先の未来へ―

平成 23 年 9 月 3 日から、中心市街地の旧デパート跡地に「まちなかキャンパス長岡」がオープンしました。シンボルマークは、黄色を基調とし、米百俵の 3 つの俵をシンボリズム化しており、それぞれ「学び」「交流」「伝統」を意味している。

『まちキャン』では、市内の 3 大学 1 高専と協働し、多様化、高度化する学びのニーズやスタイルに対応できるよう、生涯学習から一步ステップアップし、「まちづくり」「ひとづくり」「ものづくり」を三つの柱に、①出会い・交流・楽しむ「まちなかカフェ」→②テーマを持つ「まちなか大学」→③フィールドを持つ「まちなか大学院」→④プロジェクトを実践する「まちづくり市民研究所」と学びから実践へと発展させながら、楽しく学ぶことはもとより、市民協働条例の主体となれる人材育成も担っている。

長岡の伝統は「学び」であり、これは連綿と藩校の時代から受け継がれており、その中に、米百俵の精神があり、国内のみならず世界で通用する数多くの人材を輩出してきた。この『まちキャン』は、21 世紀の新しい米百俵を目指していく人材育成である。

**【所感】**長岡市は、3 大学 1 高専があり、更に 3 校の学び、交流、伝統を生かすための施策として積極的に進められている。若い人たちが中心市街地で活動し、愛着やふるさと意識を感じ、次世代の方がいずれ首都圏などで就職してもふるさとに帰って活躍してくることを願いながら進められている。本市において、市内の各高校、東播工業高校や県立農業高校、兵庫大学や甲南大学などと連携強化し、活動拠点として保健センターの跡地利用や駅前など検討してみてはどうか。

#### ・子育ての駅ちびっこ広場

**概要：**絵本館を取り入れた子育て支援施設で 1 万 3 千冊の絵本や育児書を備え保育士が司書及び読み聞かせボランティアと連携・協働した事業を実施されている。

・JR 長岡駅から徒歩 5 分の所に位置しフェニックス大手ビルの 2、3 階にありその上はマンションになっていた。

・特に、子育て世代だけでなく世代を超えた人々が集い、交流できる場として事業を実施され、次代の親になる若者に子どもとふれあう機会を提供している。加えて、地域における親子サークル・子育て支援サークルの活動の拠点にもなっている。

・まちなか絵本館では読み聞かせボランティア等の皆さんが連携しながら絵本をもととした交流事業に取り組まれておられる。

**【所感】**視察した時は、平日の午後でしたが多くの方の利用があり賑わっていた。中心市街地の一角にあることから利用者も利用しやすいのではないかと感じた。また、牛乳パックや



段ボールを使って利用者との協働によってつくられた、家の工作には目を引くものがあり、建物自体の一階から3階部分は市の所有でそれから上は共同住宅になっているのが印象に残った。加古川市においても、駅前の有効活用については今後検討していかなければならない課題であると思う。

## ・NaDeC BASE

**背景：**市街地再開発事業の中で、市が人づくり・産業振興の拠点として学生の活動や異業種交流の場として整備した。

「米百俵プレイス（仮称）」を整備することを受けて、市内の3大学1高専から人材育成と産業振興の構想「NaDeC構想」の提案があり、この構想を推進するため、一部の事業を先行して実施する施設として「NaDeC BASE」を整備。

実際に関係団体で運営しながら、再開発事業で導入する機能や取り組みの検討を進める場として運営されている。

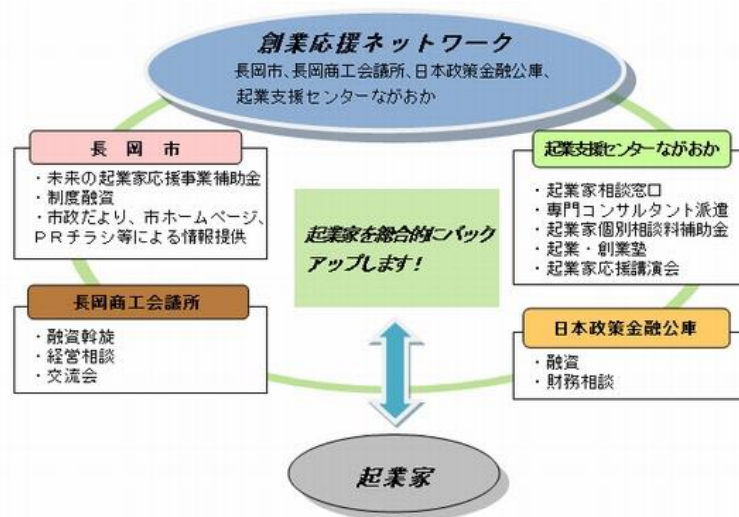
**概要：**市内3大学1高専の特色、専門性と企業家の技術、自由な発想を融合し、新産業の創出と次代に対応する人材を育成する」ことを目的に、市内の大学・高専と企業がコラボする拠点になっている。

コワーキングスペース、オープンラボスペース、ものづくり工房の機能を備え、運営は、長岡技術科学大学、長岡造形大学、長岡大学、長岡工業高等専門高校（3大学1高専）と、長岡商工会議所、市が共同（NaDeC構想推進コンソーシアム）で行い、各校の学生も参加していた。

NaDeC は・・・長岡（Nagaoka）の中心市街地を核として、3大学1高専の位置を線で結ぶと三角すい（Delta Cone）の形となることから、その頭文字を取ったもので。

BASEの意味・・・（人の）本拠地、ホームグラウンド；（会社の）本社；（行動の）拠点、基地、出発点；（政治などの）支持基盤；（経済活動の）基盤という意味である。

**【所感】** これからのまちの将来を支えていただく若者たちと一緒に考えていく仕組みは重要であり、とても有効な手段だと考えます。また、中々意見を聞く機会もないなかボトムアップの仕組みは重要である。



## ・アオーレ長岡

### 概要について

大きく分けて長岡市役所アオーレ長岡本庁舎等が入る東棟・西棟と、アリーナ棟の3棟から構成され、3棟に面して屋根付き広場「ナカドマ」が配されている。ナカドマに掛かる大屋根は鉄骨トラス造で約9,000m<sup>2</sup>あり、融雪装置により冬でも自然光による採光を可能としたほか、3棟を免震支承とKYB社製の制震ダンパー[2][3]を介して繋ぐことで、建物全体の耐震性を高める工夫がなされている。また、屋根には太陽光発電パネル（出力10kW）が設置されているほか、雨水・融雪水を循環して使用できる雨水中水化システムを備え、環境負荷の低減を図っている。



建物空間のデザインは建築家の隈研吾が「まちの中土間」をコンセプトとして手掛け、建物の随所には長岡の歴史、産物が採り入れられている。外装部は長岡城の市松模様をモチーフとして、地元産のスギ材で作った簀子状のパネルを外壁に張り付けているのが大きな特徴である。この市松模様は、行政と市民の活動が一線を画すのではなく、より緊密に連携する施設のコンセプトの象徴でもある。また、市役所窓口のカウンター間仕切り等に栃尾紬（旧：栃尾市の特産品）を、西棟1階ホワイエの内装材として小国和紙（旧：小国町の特産品）を用いている。

建物空間のデザインは建築家の隈研吾が「まちの中土間」をコンセプトとして手掛け、建物の随所には長岡の歴史、産物が採り入れられている。外装部は長岡城の市松模様をモチーフとして、地元産のスギ材で作った簀子状のパネルを外壁に張り付けているのが大きな特徴である。この市松模様は、行政と市民の活動が一線を画すのではなく、より緊密に連携する施設のコンセプトの象徴でもある。また、市役所窓口のカウンター間仕切り等に栃尾紬（旧：栃尾市の特産品）を、西棟1階ホワイエの内装材として小国和紙（旧：小国町の特産品）を用いている。

市役所アオーレ長岡本庁舎は東棟と西棟の2棟から成り、東棟には市役所の部課が、西棟には市議会議場が入る。また両棟には市民交流ホールや市民協働センターなどの交流施設が設けられている。

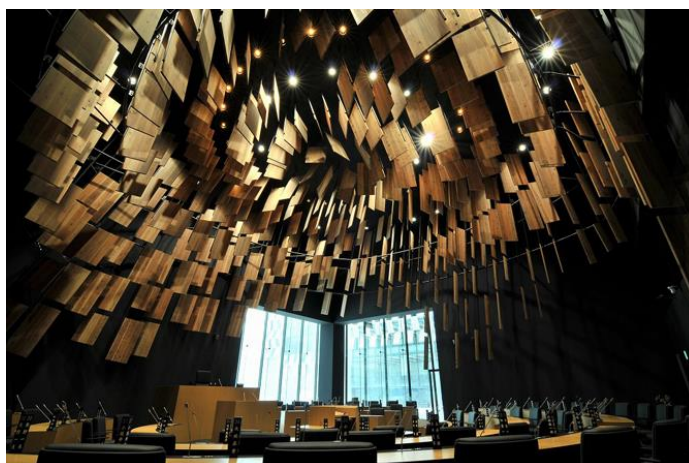
本庁舎には、市長室や市議会議場をはじめとする市政の中核部が置かれているほか、主に市民生活に関連する部課が配置されている。従来の本庁舎（現在の市役所幸町庁舎）では市民窓口が担当部課ごとに3フロアにわたって分散されていたが、アオーレ長岡本庁舎の市民窓口は東棟1階に集約され、且つ申請や手続きの目的・内容ごとに窓口を11種類に分類し、各種手続きをワンストップで行える配慮がなされている。また平日の窓口業務を午後8時まで延長し、加えて年末年始を除く土曜・休日にも業務を行うなど利便性を高めた。

東棟1階にはこの他、実写3D映像を体感できる49席のシアターが設置されている。通常は長岡まつり大花火大会や市内の観光情報などの映写が行われているが、イベント開催や一般利用にも対応している。

西棟1階ではナカドマに面して市議会議場があり、文字通り市民に近い目線での、ガラス

張りの市政を象徴するほか、傍聴席では県内で初めて親子席を設置した。また、天井には長岡の花火をモチーフに木のパネルがらせん状に配置されている。

また、同じく西棟 1 階の市民交流ホール A は、旧厚生会館の中ホールに相当する約 314m<sup>2</sup>、200 人規模の店舗。館内には下記の店舗がテナントとして出店している。



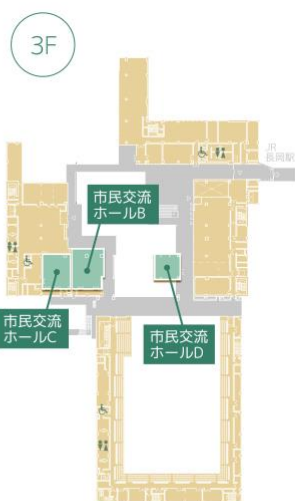
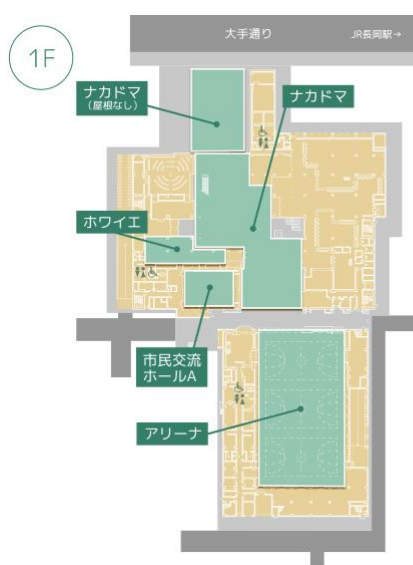
福祉のカフェ りらん（西棟 1 階 ホワイエ内、営業時間：平日 11:30 - 13:30）

長岡市社会福祉協議会が運営する軽食喫茶。市内 5 箇所の福祉施設が日替わりで店舗運営を担当する。

セブン-イレブン アオーレ長岡店（東棟 1 階 ナカドマ側、営業時間：7:00 - 23:00）

モスバーガー アオーレ長岡店（同、営業時間：7:30 - 20:00）

北越銀行 長岡市役所支店（東棟 1 階 総合窓口横、営業時間：窓口＝平日 9:00 - 15:00、ATM＝平日 9:00 - 18:00）



**【所感】** 平日は市民の方の誰でも気軽に使えるのが印象的でした。天候の悪い立地条件はあるとはいえ、駅前には行政機能を集約することは、これからの時代に即しているのではないかと考える。また、議場の一階のスペースにあり窓越しから議会の様子が見えるというのも印象的で、市民に開かれた究極の議会だと感じた。

以上